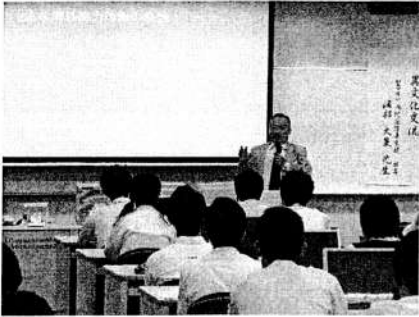


平成25年度 進路講座



第1回 10月 5日 (土)
第2回 11月30日 (土)

久留米附設中学校 43回生
久留米附設高等学校 64回生

目次

第1講座	実際のグローバルな仕事環境 城ヶ崎寛 先生	2
第2講座	国際協力、異文化交流 浦部 大策 先生	4
第3講座	会社ってなんだろう？ 西山 良輔 先生	5
第4講座	産業を拓く科学技術 芳賀 恒之 先生	6
第5講座	ダム・原発・風力発電 ー工学への招待 吉田 健治 先生	8
第6講座	環境問題への取り組み 古賀 雅之 先生	10
第7講座	法律家の仕事とその将来性 城戸 一幸 先生	12
第8講座	法律家の役割・法曹養成制度 成瀬 裕 先生	13
第9講座	公務員、それはX年後を展望した総合サービス業 井上 卓 先生	14
第10講座	行政の果たす役割について 大鶴 知之 先生	16
第11講座	人間社会における動物実験の役割 ー医学研究にて活躍する実験動物達 御船 弘治 先生	17
第12講座	医療、医学、基礎科学 田中 永一郎 先生	19
第13講座	病理医？料理医？ 伊藤 裕司 先生	21
第14講座	それでも医者になりますか？ 本田 順一 先生	22

講座番号 1 【一般、11月30日（土）実施】

講師	城ヶ崎 寛 先生〔高校30回生〕 ハーベイナッシュ・グループ 日本支店 ビジネスディベロップメントディレクター
題目	実際のグローバルな仕事環境
<p>僕がこの先生の講座で学んだことは「世界と日本のIT業界の違い」というものでした。日本人は従来から物作りは得意でしたが、マーケティングの能力に関しては余り高くなく、他の国の技術が次々と追いつき始めた今、日本のIT業界に足りないものは、「客が何を求めているか」ということを考えるということでした。また、日本人と外国人とのコストパフォーマンスが圧倒的に違うことも現実問題としてあげられました。日本ではIT業界の志望は少ないですが、アジアでは花形として優秀な人材が多くIT業界に進むらしいです。</p> <p>特に中国とインドでは、急速的な技術の向上によりIT業界に進む人材もかなり優秀になりました。更にこの中国やインドの人は、給料が日本人よりかなり安くて済むという大きなメリットがあります。コストも低い上に優秀な人材であるということは、雇用する点に置いてインド、中国が圧倒的に日本人に勝る点であると言っても過言ではありません。</p> <p>そこで先生が仰っていたことは、「今の日本ではコストパフォーマンスでは勝てないので、これらの人材をいかに上手く利用するか」ということでした。雇われるという点に置いては勝てないのなら、こちら側が雇う側に立ち、優秀な人材を利用することで日本のIT業界は更なる進化を遂げる、という事だと僕は思いました。</p> <p>僕がこの講座で感じたことは、「国内にとどまらずグローバルな目で世界を見つめる」事が大事であるということを感じました。今はどんどん世界のグローバル化が進む中、もっと広い視野を持つことによって見る世界も変わるのではないかと僕は思いました。とても貴重な講座、ありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">【文責 A組 田中晃生】</p> <p>海外の企業に就職して働くということは今までほとんど考えたことがなく、海外で働くことが出来るような人はほとんどいないイメージがあった。しかし、そのようなところで働いている人が附設の先輩にも実際にいて、それはまったく遠い存在だというわけではないのだということを感じた。経済のグローバル化が進むに伴って、海外で働くことが必要になる可能性も大きくなり、英語を話す能力も重要になってきているのだと思った。そのため、普段の生活から出来るだけ英語に触れるようにして、そのスキルを出来るだけ身につけたいと思う。そして、いろいろなことに意欲を持って取り組み、自分がやりたいと思ったことが出来る仕事につけるようにしたいと思う。そのために、普段から興味を持ったことや気になることを見つけたらそれを追求していくようにしたい。</p> <p style="text-align: right;">【文責 B組 中尾亮介】</p> <p>僕は将来、弁護士になってお金をためてから起業しようと思っている。その際に、グローバル化も重要な要素だと思ったので、この講座を受講しました。城ヶ崎先生は、今後の事業で大切になってくるのは、マーケティング、マネジメントであるとおっしゃいました。やはり、何か成功するには、突飛な発想やものすごいひらめきが必要なのではないかと感じていましたが、顧客あつての企業であるということを変えて感じ、起業の際の参考になればよいと思えました。また、大学を選ぶ際には、自分の行きたいと思う希望の大学だけでなく、人脈の厚さなどを参考にして、大学を選ぶのもよいというアドバイスをいただいたので東大一本と決めていましたが、他の大学を一度調べてみようと思えました。僕は最初に述べたように弁護士になる予定ですが日本の中だけでなく、海外でも活躍できるように今日のお話を参考にして、頑張っていきたいと思えます。</p> <p style="text-align: right;">【文責 C組 岩熊凜】</p>	

日本の社会は中小企業が支えていて、今、日本の中小企業に欠けているのはマーケティングだそうだ。先生はそのマーケティングを手伝う中小企業診断士という仕事をなさっていた時期があった。その後、先生は博士後期課程に社会人学生として入学されている。なぜ、社会人学生として入学したかという、国際レベルの活動で認められるためにはドクターが必要不可欠だからだそうだ。先生がグローバルな仕事環境で大変だったことは、日常会話での英語と、仕事で使う英語の違いだそうだ。仕事で使う英語はわかっても、日常会話で使われる英語はわからないということがあった。日常会話で使われる英語の重要性に改めて気づけた。

先生の職業である営業という職業に、僕は関心を持っていて、先生が、営業には文系も理系もあまり関係がないとおっしゃっていたので、自分の好きなほうを選ぼうと思った。自分の進む進路が見えた気がしたのでこの講座を受けてとてもよかった。

【文責 D組 楠本賢亮】



講師	浦部 大策 先生〔高校24回生〕 聖マリア病院 国際事業部 部長
----	-------------------------------------

題目	国際協力、異文化交流
----	------------

日本では普通、医療技術は進んでいる方が良いと考えられているが、それがすべての国、主に発展途上国でその常識が通じないことにここまで日本人は何も知らないのかと感じた。もともと、発展途上国ではマラリアなど、日本にはない病気があるのは知っていたが、それ相応の医療技術、薬があれば治るし、金と人員が足りないだけだと思っていた。しかし、この治療を文化が阻害しているとは思ってもよらなかった。人が死んだり病気になることを文化としてやって、それをやめないで治療することを考えると、医者に対して必要とされるものが、日本とは大きく違うというを思った。最初のほうでも、日本は欧米人と違って英語を勉強して習得するのに対し、英語のテレビ番組などで覚えたという話で、言葉を概念でとらえるという考え方は新鮮だった。この講座は日本からだけの視点だけではなく、自分にはない外国の視点というものを教えてくれたと思う。

【文責 C組 姉川盤音】

今の僕のなかでは、将来世界に出て外国の人達と仕事をしていくという考えはない。僕の日常生活の中で海外との交流は限りなく少なく、外国で起こることはいつもテレビやネットの中の別の世界だ。僕とは逆に先生は学生の時から異文化に興味をもち、JICAの活動で多くの外国の状況を見てこられた。

日本を出ると文化の違いに驚くことは多々あるという。イスラマバードの病院の支援に行ったとき、パキスタンの医師のスキルの高さに驚いたという。教科書に書いてあることは丸暗記が当たり前で、先生は何でもできず恥をかけたそうだ。日本人は現地に行き教えるという姿勢ではなく、むしろ共にその病気についての対策を考えることが大切だそうだ。講義で先生は、世界の流れその環境の中に身をおく、自分の強みを見つけ自分が夢中になれるかということを強調した。中国韓国が台頭してくるなかで、日本がおいでいかれないためには外に目を向けねばならない。

【文責 C組 大串恒誠】

今回の浦部先生の講義は、国際協力をしたい日本人にとって、有益な教訓が多くあった。私たち日本人は、先進国の住人として、潜在的に誇りを持っていると思う。しかしそれが傲慢に転じて、日本基準で考え、現地の実情に合わない支援を行うのは、あってはならないことである。しかし、日本の医学界の権威の人達でも、そうなることを予期できなかったパキスタンの例や、現地の習慣を活かしたラオスの例を聞き、傲慢ではなく、日本人として誇りを持って活動すべきなのだということ学んだ。また先生が活動中に撮られた、今でも家のすぐ横を下水道が流れているパキスタンの写真などを見て、自分の中での当たり前が通用しない世界が、思っていたより身近にあることを実感し、自分がどれほど恵まれた世界にいるかということ、思い知った。もし自分が海外で活動する機会があったら、先生がおっしゃったことを念頭においておきたいと思う。

【文責 C組 重松大樹】

正直なところ、僕は職業選択という段階よりもっと低次元、根本的な段階で足踏みしている状態、すなわち何故働くのか、他人の為に働き、働くことで何かを創造し、この世界に影響を及ぼしたところで、100年後には自分は死んでいるのであって、じゃあ死ぬまで楽しいことをして過ごせばそれで満足か、と言われればそれも違う…。そういうことに決着をつけることができている状態にいて、今回の浦部先生の海外協力の経験のお話を聞いても、僕にはその問題解決の糸口は見つからなかった。ただ、父が医者であることもあり、医学には興味があり、このまま進路が決まらなかった場合には医師を目指そうかと思っていて、また、JICAなどでの、開発途上国への医療援助のお話は、僕の医者としてのキャリアを考える上での選択肢として非常に有意義なものであった。

【文責 E組 野村政爾】

講座番号 3【企業、11月30日（土）実施】

講師	西山 良輔 先生〔高校30回生〕 JFEエンジニアリング株式会社 監査室長
題目	会社って何だろう？
<p>西山良輔先生からは、社会における会社の存在意義や立ち位置、社会や会社や個人などの関連性について教えて頂きました。西山良輔先生は長く企業に勤めておられ、原価管理・経理・営業・広報・内部監査などを経験なされているので、先生の体験を交えて話されたので、詳しく理解することができました。会社とは、様々な関係者と良い関係を保ちながら在る組織のことで、関係する様々な人々や組織が長く在り続けることが目的です。会社の立ち位置は社会の価値観の変化によって変化する、初めはより豊かな社会とすることを目指し、バブルの崩壊後はより安心な社会を目指し、今は永続する社会を目指しています。そのために、大震災との対応や再生可能エネルギーの開発などが今進められています。会社が今の社会の価値観と合っているかが、会社を選ぶ際に大切であり、それが自分の価値観とも合っているか、それらをふまえて自分の進路を考えていこうと思います。</p> <p style="text-align: right;">【文責 C組 松永拓己】</p> <p>今回の講座は企業の先生のお話ということで文系志望の僕としては興味を持って聞くことができた。</p> <p>先生の勤められているJFEエンジニアリングは製鉄の企業が元になっているが世界的に有名なビルやインフレの建設も行っているようだ。講座の冒頭で会社を社会の中に配置した図を見せて頂いたが、それで会社と社会とのかかわりの多さに驚いた。それらの「かかわり」をすべてよい状態に保つことで会社が成り立っているという先生の話が印象的だった。会社の成長のためにはそれらの「かかわり」をよい状態に維持しつつも社会のニーズを常に考えて利益を出し続けなければならないという。</p> <p>また先生の企業も震災で大きな被害を受けたそうだがこれからの企業には「社会への対応力」以外に「万が一の事態への対応力」も必要なんだろうと思った。</p> <p>また西山先生のようなエネルギー関連の仕事もされているかたにエネルギーとの向き合い方や日本のエネルギー事情、さらに原発の話も聞くこともできた。</p> <p>今回の講座であまり知らなかったエネルギー業界について理解を深めることができよかったです。</p> <p style="text-align: right;">【文責 D組 坂田雄紀】</p> <p>西山先生の講義を受けて何より印象的だったのは、講座とは関係ないが、まず笑いが独特だったこと。加えて、他の先生よりも多く中高生時代のことを語っていただき、とても面白かったということだ。（体育祭で右翼が暴れ回るという内容のいろんな意味で危ないパフォーマンスは僕も是非見てみたかった）</p> <p>講座の本題についてだが、こちらは結論から言うと、これまで会社というものに僕ははっきりとしたイメージが湧かずにいた。が、実際に聴き質問させていただいて、会社も、例えば高校などにいろんな校風があるように、社によって雰囲気が様々でどこもお堅い感じというわけではないし、ブラック企業で埋め尽くされているわけでもない、ということが分かった。自分の中で選択肢が一つ広がったように思う。</p> <p>ただ、共通して言えるのはどこも利益を常に追求しなくてはならないということで、これは会社という在り方を維持するには避けられないシビアなところだ。西山先生の勤めるJFEエンジニアリングは名前を聞いただけでは、どんな職業柄なのか想像がつかないが、講義の中で、高度な技術を用いたインフラ建設の、夢がある会社だった。</p> <p>今回の進路講座の選択は、何か1つの分野に偏らずにいろんな分野のものを受けようと決めていたが、やはり自分の知らない世界のことを直接聴くというのはとても新鮮で、つくづく自分が無知であり、将来が可能性に満ちたものなんだと実感させられた。</p> <p>西山良輔先生、興味深い講座をありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">【文責 E組 菱沼秀和】</p>	

講座番号 4【企業、10月5日（土）実施】

講師	芳賀 恒之 先生〔高校30回生〕 NTT 先端技術総合研究所 企画部 担当部長
題目	産業を拓く科学技術
<p>私は今回の講義で、must, will, can が職業選択にいかに関係するかが痛感した。私は、まだこの3つを十分に身につけていない。これらを身につけて、自分に最も理想的な職業を選択したい。</p> <p>私に欠けているものは客観性だ。思い込みが強く、狭い視野で物事を見てしまう。自分の好きなことには努力するが、興味のないことは振り向かない。勢い、効率を追い求めてしまう。このままでは未知の可能性が埋もれてしまう。まして、must, will, can を充実させることなどできない。</p> <p>私は今回の授業を契機に次のことを心がけたい。多角的な視野を持つこと。何にでも興味を持って取り組むこと。粘り強く努力し続けること。これらを身につけるために、毎日新聞を精読することや、広い読書などを実践したい。</p> <p>自分を成長させて、自分を生かせる仕事に巡りあえるよう、日々努力したい。</p> <p style="text-align: right;">【文責 A組 岡田怜子】</p> <p>「40歳まではフラフラしてても大丈夫。」芳賀先生のその言葉に、私は大きな衝撃を受けました。幼い頃からこれと言った夢を持ったことがなく、理系に進みたいということ以外は全く将来のことを考えていなかった私。そんな私も、近頃は「早く行きたい大学とやりたい仕事を考えなければ…」と焦り始めていました。そのため、今日のこの講座は進路決定の参考になると同時に、私にとって大きな励みとなりました。また、今まではいい大学に入りたいから勉強をしていましたが、それは正しいとは言えないということに気づけました。大学はゴールではなく、1つの手段である、と。999回の失敗と見逃しそうなほど小さな1回の成功一何度挫折しても、必ず将来何かにつながると信じて努力することが大切。「自分は何のために勉強しているのか。」なんて愚問ですね。今のうちにできる限り可能性を広げ、20年間たくさん悩み、10000時間継続できることを探して行きたいです。</p> <p style="text-align: right;">【文責 A組 米津亜紀】</p>	



この講座のメインテーマは「キャリア」であった。単に職業としてではなく、人生における自分の足跡としてのキャリアを、いかにうまく構築していくか、あるいはそのためのひとつのアイディアが、提示された。中でも自分は、いかに自分の進むべき道（もっと単純にいうなら「分野」だろうか）を決定するか、ということについてまとめる。

芳賀先生曰く、「ある分野がその人に適したものであるかどうかを判断する上で、基準が必要である。その基準となるのが、must, will, can の三要素だ。」わかりやすく言い換えるなら、must が使命感、will が願望、can が能力といったところか。この三要素がそろって、人間は初めて最高の成果が挙げられるというのだ。確かに、能力の不足やモチベーションの低下（願望の欠如）のなかで、いい仕事ができるとは思えない。

しかし、使命感が必要というのは、自分にはいささか意外だった。好きな仕事をやっている、能力もあるのに、成果があがらないなんてありえるのだろうか。実のところ、これも大いにあるらしい。たとえば誰も自分の仕事を賞賛してくれない状況の中では使命感を保つことが難しい。そしてこれが、モチベーションの低下に、さらにはパフォーマンスの低下に繋がるのだ。

さて、そうはいっても、must, will, can のすべてを十分に満たす仕事を探すのは難しい。そんな時、特に注目すべきなのは、実のところ must である。さきにも、暗に示したが、must, will, can は相互的に影響しあうものである。ある事柄に、使命感を持つということはそれが自分の価値観にあっていうことであり、ひとは自分が価値を感じるものを愛する。そして、好きになったものには時間をかけるのを惜しまないから、必然的に技能も向上する。確かに。

これを自分に関して当てはめると、やっぱり自分は理系だと思えた。それがわかっただけでも、芳賀先生の話はためになった。

【文責 D組 麻生豊大】

「可能性と目標」

今回の講座で先生は、「若いうちはなるべく可能性を広げておくことが大切だ」と仰っていた。僕は将来就きたい職業が無く、早く決めなければと焦っていたが、これを聞いて、その必要はないと安心した。むしろ、ここで将来の職業を無理に決めてしまうと「可能性を狭める」ことになるかもしれない。とは言え、漠然とした目標程度なら当然持っていた方が良いので、このままではいけないとも思う。今回の講座では、職業の選択基準やキャリアとは何かについて一般化してお話しいただいたおかげで、将来について今までより具体的にリアリティを持って考えることが出来た。自分がやらなければならないこと、やりたいこと、できること。この3つをよく吟味して、これからを考えたい。また、「定義された戦いに勝つだけでなく、自分で戦いを定義することも必要」と先生は仰った。これは実行するのは大変だが、実行できれば「可能性が広がる」と思う。この講座で得られたものは多大である。

【文責 E組 肥川雄】

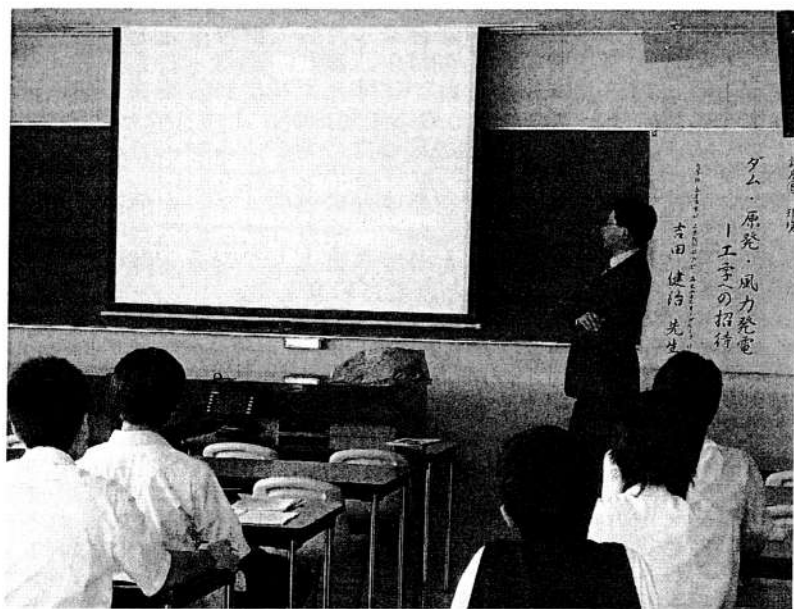
講座番号 5【環境、10月5日（土）実施】

講師	吉田 健治 先生〔高校30回生〕 熊谷組 土木事業部 土木設計部 PC・再生エネルギーグループ部長
題目	ダム・原発・風力発電 ―工学への招待
<p>「技術者の工夫」 「工学への招待」という講義名から専門的で難しい話なのかと思っていたが、スライドを使いながら具体的でわかりやすく説明していただいて、興味を持ちながら聞いた。その中でも僕が面白いと感じたのは飛行機のエンジンについての話だった。飛行機のエンジンは全部が故障しない限り墜落しないらしい。しかし、一つでもトラブルを障じると緊急着陸する決まりがある。安全面を考えると、エンジンは多い方がいいが、その分一つのエンジンがトラブルを起こす確率も増え、コストもかかる。よってエンジンは双発、三発、四発の種類があるが、日本では双発が主流である。技術者はこういう多くの面を考えなければならず、技術者のジレンマを感じた。だが、この講義を受けて普段ニュースであっている環境問題にもより関心が持てるようにもなり、貴重な体験だった。 【文責 A組 萩野貴明】</p> <p>僕は、今回の講座で、建築への興味をより深めることができたのではないかと思う。身近にある言葉や意味も知ることができた。又、仁保ジャンクションや、明石海峡大橋や、東京厚生年金病院などの有名な建築に熊谷組が関わっていらっしやったことにはとても驚いた。僕は、前々から建築に少し興味を持っていたので、建物などの建設方法を知ることができてよかった。たとえば、大滝ダムの建設は地球を削り、谷を埋め立てて水を溜め、貯水すれば、完成。一見、単純そうに見えるが、これには、多くの労働力や、細かい地形の測定、それに、長い年月がかかる。</p> <p>そして、最近何かと問題になっている原子力発電に関しては、飛行機の衝突まで検討し、津波だけでなく、テロや竜巻への対策も計算に入れながら建てているようだ。今回の講座をこれからは生かしていきたい。</p> <p>【文責 C組 梅田桜詩】</p> <p>この講座では、最近話題のダムや原発などがテーマになっていて、また前から土木にはほんの少し興味があったのでこの講座を選択した。講座の中では、ウォータージェットを使い建て替えの難しい病院を半分ずつ建て替える話や、大滝ダムの建設を担当したときに、総額600億円、50年以上もかけて造りあげる厳しさなどを話していただいた。原発については日本と海外の違いなど、現地の体験をもとにした話を聞く事ができて非常に大きな経験となった。吉田先生は高校時代からとても素晴らしい人で講座も聴きやすかった。</p> <p>今回の講座のおかげで、少しは土木に詳しくなれたし多少なりともエネルギー問題について考える事ができて、なにより11月18日が土木の飛驒という事がわかった。自分も先生のようにやりがいのある仕事に就けたらいいなと思う。</p> <p>【文責 D組 藤浦剛己】</p>	

原子力発電を使用しない方がいいという風潮は当然の如くあるが、いくら新エネルギーの開発を目論んだところでそれを補うことはおそらく不可能だろうと思う。「嫌なら近くに住むな」という訳にも、法律上、道徳上できないが、今回の話のように（すべての事象に言えることだが）技術者が検討を重ねても絶対的な安全は存在せず、事故、それ以上のもはや天災レベルのことは起こりえるのだからそれは必要犠牲だと割り切る必要があるように感じられた。言ってみれば、火山の麓や氾濫の可能性がある川の近くに家を建てることだって、極端な話、いつ隕石が落ちてきたり、飛行機が墜落してきたりするかわからないのだから、危険と隣り合わせということに関しては、差異は無いような気がしたし、原発事故は人災ではあるが、天災でもあるということ意識すべきだろうなと思った。

蛇足ではあるが、先生が見せてくださったダムの写真が思っていたよりも綺麗だった。作り上げたダムを上から見たときに感動したと仰っていたのも納得がいった。個人的にはコンクリのダムより砂を活かしたダムの方が自然らしさを感じられて好きなので、そんなダムがもっと増えてほしい。

【文責 E組 山本尚志】



講師	古賀 雅之 先生〔高校25回生〕 コヨウ株式会社 取締役 会長
題目	環境問題への取り組み
<p>今回の講座では、先生の環境問題に対する取り組みが、興味深く聞けました。たとえば先生が今まで取り組んできた海の干潟再生事業については、ヘドロが少なくなっていくのがよくわかりました。人が歩けなくなるほどのヘドロは怖いと思いました。また、世界の水の中でとても希少な飲み水を少しでも守るための水質浄化ブロックについての話もとてもわかりやすかったです。エネルギープラントが不要であるのと、自然にいる微生物を使うのは画期的な方法だと思いました。フルボ酸についての話は少し難しかったですが、とても有用なものだとわかりました。さらに、様々な過酷な条件でも芽胞を作って生き延びる細菌について聞いて、とても驚きました。</p> <p>今回の講座ではこれらのようなたくさんのお話を学びました。元々このようなことには興味があったので、先生の講義はとても楽しかったです。このような仕事もあるんだな、と思い、自分の将来についての選択肢が増えた気がします。ありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">【文責 D組 孫忠源】</p> <p>僕は今まで環境の保全にはあまり興味がありませんでしたが、先生の講座を受けて、環境を守ることの大切さや難しさが分かりました。また、先生の話の中で出てきた、有明海で取れるアサリの量が百分の一にまで減少しているという話にはとても衝撃を受けました。</p> <p>現在の有明海には、たくさんのヘドロが溜まっていてアサリなどの貝が住めなくなっているそうです。その原因となっているのは、工場や家庭などからの排水ではなく、農業での排水だということで、有明海をきれいにするためには、農業で使う肥料などを改善することが大切だと思いました。そのために先生がフルボ酸を使った研究をなさって、ヘドロを除去することができたという話があったので、そういった研究などが地球の環境を守ることに繋がるんだと思いました。</p> <p>先生は他にもエコバイオブロックなどを発明なさっていて、自然の力で水を浄化するしくみを作るためには、普段使っているものに、特殊な機能を持たせるという発想が必要なのだと分かり、その難しさを知ることができました。今まで聞いたことのない話を聞いて貴重な体験になりました。ありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">【文責 D組 原口大雅】</p> <p>近年の環境汚染は深刻である。これは発展途上国における工業化が主な原因だが、発展途上国には環境保護にあまり資金を割きたくないため、先進国の使うような大量の資金を必要とする科学的浄化が行われずに環境汚染が深刻化している。その問題を解決するかもしれないのが古賀先生の開発されたバイオブロックである。バイオブロックとは、納豆菌を閉じ込めたコンクリートブロックのことだ。納豆菌には水質の浄化作用があるため、バイオブロックを汚水に浸けておけばみるみる汚水を浄化してくれるのである。これは比較的安価なため発展途上国も利用しやすい。実際に、タイにおいてはその有用性が実験により認められ、河川の浄化のため使用されている。また、バイオブロックは国外だけでなく日本でも注目されている。有明海では海苔洗浄に使われるリン酸の汚染が深刻化していたが、バイオブロックは実験で一定の効果を見せている。バイオブロックの欠点は重金属の汚染が浄化できないことと遅効性だが、それを指摘されてからすぐ開発を始められたようだ。このような姿勢を見習って、今や未来を過ごしていきたい。</p> <p style="text-align: right;">【文責 D組 渡邊伸哉】</p>	

講座を聞く前には、事前資料を読んでも内容がよく分からず、あまり興味がわかかなかったが話を聞いて見て、川の汚染を置くだけで浄化するブロックという発想がとても面白いと思った。中でも、実家のコンクリートの事業をついでにここまで発展させるというは大変難しいことだろうと思う。印象的だったのは、技術面の話をとても楽しそうにお話なさっていたことだった。納豆菌が浄化することを見つけるのはとても大変だったそうで、生物学的なことを勉強しなければならなかったらしい。経営のことも印象的だった。特に発展途上国に売れているそうだが、年末には、予算の余った自治体を買うらしい。リーマンショックの時がきつかったというのは理解できたが、民主党政権でもきつかったというのは意外だった。

また、このような事業をして海外に売り込むには英語が必要であるので、英語の重要性を再認識した。インドや中国などは、これからも重要な市場であり、日本製品を海外にこれからも売り込むことは途上国の技術革新によって難しくなっているが、やはり日本の生きる道ではないかと思った。

ブロックについては、コンクリートの空気を多く含むという特性を生かして、コンパクトで比較的安くできるというのが魅力的だと思った。金属を浄化できないという欠点も改善する努力をしているということで、現状で満足しようとしめない精神を見習いたいと思った。

【文責 E組 空閑諒太】

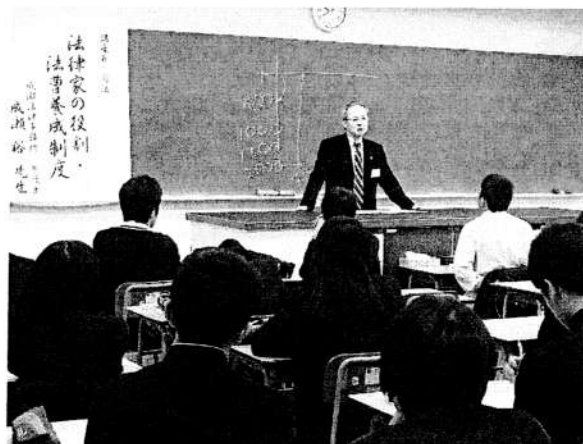


講座番号 7【司法、10月5日（土）実施】

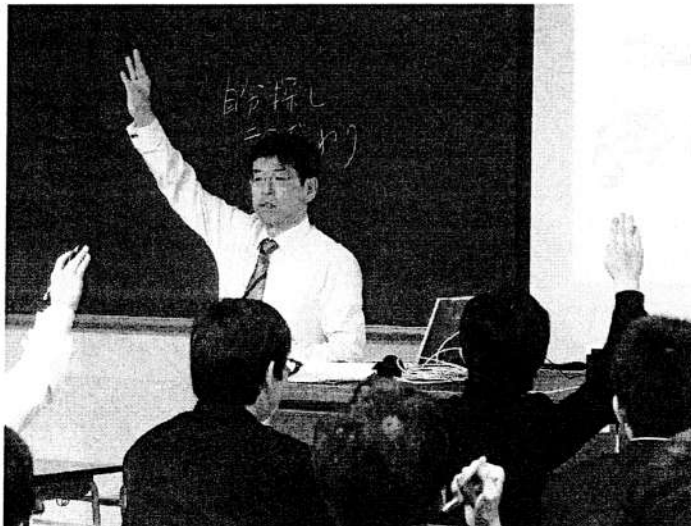
講師	城戸 一幸 先生〔高校30回生〕 (株) シンプレクス・コンサルティング 企業内弁護士
題目	法律家の仕事とその将来性
<p>今回の講座では、企業弁護士というあまり聞き慣れない職業について学んだ。企業弁護士は、個人の間のお金のトラブルや離婚問題も扱っている。その際、行政の仕組みも教えてもらった。一般人が銀行にお金を預金し、そのお金を銀行が企業に貸付をすることを、間接金融という。そして、企業が証券会社を通じて関志かと株のやりとりをすることを直接金融という。その企業弁護士になるための司法試験なのだが、とても難しい。さまざまな大学から志願者が出ているが、どれも合格率は五割以下である。場合によっては、0人なんて大学もある。そして、何年も落ち続け、三振博士なんて不名誉な称号をえる場合もあるのだという。そうならないように先生が言っていたアドバイスの一つとして、上位のロースクールに行ったほうがよいらしい。そのような話があるので、今からでも司法の勉強をしても早くはないと思った。</p> <p style="text-align: right;">【文責 B組 友松雅人】</p> <p>弁護士の話ということで現行制度の問題点などを中心に興味深い話が聞けて、有意義な時間だったと思う。今回の話で一番の衝撃は、今や企業弁護士として活躍なさっている城戸さんのそれまでの経歴の話だった。勉強をせず、ビリにいた人でも世間で活躍しているなんて、改めて附設の底力を知った気がする。ただ、高校卒業後苦労した上での話なので、やはり高校時代の勉強をおろそかにしないよう肝に銘じておこうと思う。また、弁護士になる大きなリスクと苦労を聞くと、これまで僕が描いていた像とはかなり異なっていて、改めて並みの努力では城戸さんの言う給料とやりがいの2点が揃った良い仕事にはつけないと思わされた。まだ、将来の夢も決めかねているくらいだが、弁護士になるにしてもほかの職業を目指すにしても結局、いい大学に入りいい教育を受けるのが必須条件なので、より難関の大学に行くことができるよう頑張っていこうと思う。</p> <p style="text-align: right;">【文責 B組 石井柊斗】</p>	



講師	成瀬 裕 先生 [高校 22 回生] 成瀬法律事務所 弁護士
題目	法律家の役割・法曹養成制度
<p>成瀬先生の話聞いて、弁護士の仕事は私が思っていたのを遥かに上回る大変さで命がけの仕事だと分かった。弁護士、裁判官などの法曹家の仕事は普通に生活をしていたら一生関わることのないような人との関わりがあるもので、少し恐ろしいものでもあるなど感じた。成瀬先生も他の方も裁判においては何が正しい方法なのか分からないそうだ。裁判員制度によって刑が今までより重くなったといわれるが、今までの刑が軽かったのだとも考えられると聞いてすごく納得できた。答えが出ることはないので、一生考えさせられる仕事だと思った。また、弁護士にもたくさんの種類があるそうだ。日本の法廷に立つことのない、企業を専門とする事務所や海外の会社の弁護士など。同じ弁護士でも仕事は全く異なることを知った。これからの時代は日本の知的財産を守るため他国との裁判ができるような優秀な若手が必要とされるようになるそうで、とても厳しい道だと思った。</p>	
【文責 A組 田中杏佳】	
<p>今回の講座では、法曹界について学んだ。法曹弁護士になるまでの過程や、今の大学からの就職率なども同時に教えてもらった。法曹とは、特に、裁判官、検察官、弁護士のことで、法曹三者ともいわれるらしい。法曹三者になる資格を法曹資格と呼び、法曹資格は一部の例外を除いて原則として司法試験に合格することが要求される。その司法試験なのだが、とても難しいさまざまな大学から志願者が出ているが、どれも合格率は低いようだ。あと、弁護士は基本弁護団を組んで、そのグループで行動するらしい。その弁護団は大体10～15人くらいのグループで、ほぼランダムに組織されるらしいのだが、中は非常にドロドロしているらしい。そのなかで、責任を押し付けられた人がリーダーとなり、みんなを引っ張っていくという、学校でいう班長決めのようなものが大人の世界でもあるらしい。だから、ドラマのように仲がいいなんてケースはあまり聞かないそうだ。</p>	
【文責 B組 友松雅人】	
<p>民主主義-事実を元に、それぞれが自由に考え自由な意見を持つこと。そこに、正しいも間違いもない。だからこそ法律家がすべきである、憲法に乗っ取った「民主主義」を守るとは、考える材料となる正しい事実をしっかりと伝える、つまり知る権利を守り抜くことである。本当の意味で、国の形を法律家が守り抜くとはどういうことであるか教わった。</p>	
【文責 E組 古川剛士】	



講師	井上 卓 先生 [高校 30 回生] 東京都産業労働局担当部長 東京観光財団 常務理事 総務部長兼観光事業部長
題目	公務員、それはX年後を展望した総合サービス業
<p>東京大学文科一類に合格された先輩ということもあり、ある意味一番興味のあった講座でしたが、とても有意義な時間が過ごせました。</p> <p>井上先生は、東京という一国にも比肩する経済力を持つ都市の運営に携わり、数多くのポストを経験してきたそうで、経験談は楽しくて勉強になるものばかりでした。その中で先生が繰り返し強調されていたのは、英語の重要性でした。というのも、2020年のオリンピック開催地が東京に決定したことで、英語を使う機会がこれまで以上に増えたそうなのです。先生は英語をもっと勉強しておけば良かったと後悔されていましたが、東京大学に受かった先生でさえ、英語力の不足を感じているという事実に驚きました。</p> <p>先生は講座の最後に、時代の流れを見極めて、やりがいのある仕事を見つけてください、とおっしゃいました。私は楽しそうに話される先生を見て、自分もやりがいを持つ仕事に就きたいと思いました。</p> <p>井上先生、貴重な体験ができました、ありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">【文責 A組 柴田治樹】</p> <p>井上先生は「Think global,act locally.」という言葉が強調された。これは、全体を眺めて熟考し、目の前のことにしっかりと取り組めという意味だ。社会や人間というものは同じ状態がずっと続くというわけではなく常に進化している。現在の日本では今後の少子高齢化の進行が危惧される。そのような時代の変化を読み取って未来を予測し、全体のビジョンをしっかりと持ちつつ今やるべきことをきちんとこなす。これが自分が実現したいことに向かって実際に行動する際に一番大切なことである。そしてそれは人に対してサービスを提供する時にその質をより良くする為にも不可欠であると教わった。また職業選択において、組織の影響力を活用する方法、つまり企業などに就職する方法と、個人の力で切り拓く方法がある。そのどちらを取るにしても職業人として自分を活かすには、実現したいことを熟考し、自分なりのビジョン・こだわりをしっかりと持ち続けることが大切であると先生はおっしゃった。先生に教わったことを意識しながら目標に向かって頑張っていくと思った。</p> <p style="text-align: right;">【文責 B組 野田真聖】</p>	



井上先生のお話を聞いて、公務員の重要さを改めて感じました。まず、井上先生が仰ったことは公務員の概要でした。公務員とは、人生の全ての局面において国民の幸福のための公平なサービスを提供する職業である。しかし、人が変わればサービスも変わるので、その人々の要求に柔軟に応じたサービスを作らなければならない、と。次に「三間」を考えることが大切だと述べられました。この「三間」とは、時間・空間・人間のこと。つまり、同じ公務員でも、国や県、地方によって求められるものは様々なので、いつ、どこで、誰に対して行うのかを熟考するものだ、と。最後に、公務員はX年後を見る職業であると強調されました。未来は不確定なものであるから、予想することが難しいのは当然のこと。それでも、例えば加速する少子高齢化などの将来起こりそうな問題に対して、適切な対策を取っていかなければならない。以上のようなことを井上先生はお話になりました。

この講義を受けて、今まで何となくぼんやりとしていた公務員のイメージが一変しました。以前は単調そうな仕事だと思っていましたが、かなり大変だと気付かされました。人や時の流れを感じ取り、提供するサービスを変化させていくのは並大抵ではないでしょう。そういったことから、大変誇りに思える職業だと思いました。そのような方々のおかげで今日の日本があると思うと、感謝の気持ちでいっぱいです。井上先生、勉強になるお話ありがとうございました。

【文責 B組 樋口慶祐】

この講座では、都庁の仕事に限らずすべての公務員や職業に共通する大切なことについて講義してくださいました。まずは公務員に求められるモノについての概要を書きたいと思います。公務員に求められるサービスとは、「法の下での平等」を実現するため、ゆりかごから墓場まで人生のあらゆる局面において国民の幸福のために「公平な」サービスなのだそうです。これを実現するために念頭に置いておかなければいけないのが、三間の精神です。三間とは、時間、空間、人間の三つの間のことです。これらは、公務員のサービスだけでなく他の仕事にも共通して言えることであり、職業選択時にも考えなければならぬことなのです。それに加えて、公務員は20年後の少子高齢化が進んだ未来を見通したサービスを提供するのも重要な仕事だそうです。

この講義を通して、時代の流れを読んで(時間)、仕事での活動範囲を考え(空間)、自分に向いている、自分がやりたい仕事をする(人間)、この三つをじっくり考えて自分の人生をかけても悔いのない仕事をする。これが、最もいい職業選択なのでは、と私は思いました。私たちの職業選択での大きなヒントを下さった井上先生には、感謝したいと思います。

【文責 D組 高木爽太郎】

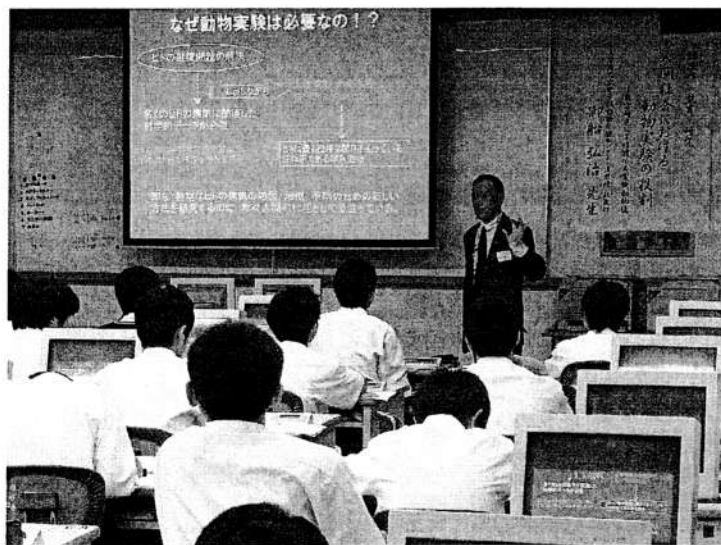
講師	大鶴 知之 先生〔高校31回生〕 厚生労働省 年金局 国際年金課 課長
題目	行政の果たす役割について
<p>僕は将来、外務省に入省するつもりなので、今回の進路講座で最も興味を引かれたものがこれだった。今までにも官僚の方の話聞く機会は何度かあったが、異動の話詳しく聞かせてもらったのは初めてだった。国会の会期と関係しているため7月から9月にかけて異動が多いということを知り納得した。</p> <p>日本の年金制度についてだが、国民皆年金なのは知っていたが、それが国際的には珍しいということは意外だった。また、積立期間などが国によって違うためそれを調整するために社会保障協定というものを結んでいるということだった。しかし、予算の問題などで適用していない国も多いらしい。この協定を結べるか結べないかというのは国民の生活に直接関わることなので、やはり官僚というのは責任のある仕事だと思った。</p> <p>先生がいつも意識しているのは将来の見通しだということ。それは常に大切なことだ。より大きな、国の将来というものを見通すために、僕らも十代から、地に足をつけ続けながらも先を見るということをお願いしたいと思う。</p> <p style="text-align: right;">【文責 B組 古川敦大】</p> <p>大鶴先生は、国家公務員の中でも特に行政官としての仕事をされていて、講義ではその仕事の内容を細かく説明してくださいました。今現在先生が大きく関わっているのは年金制度で、その大きな事業を維持するのに尽力されていました。また、国家公務員はほぼ二年に一度で異動があるそうです。</p> <p>他にも、海外への留学や研修も多く、価値観や予測行動の違いに苦労されたそうで、そのような経験が出来るのは魅力的に感じました。</p> <p>国家公務員は国の中心で一生懸命働く仕事なので、やはり大変なことも多く、それ相応の覚悟が必要だと思いました。</p> <p>今回の講座では、普段聞くことができないことも聞けたので、得た物を自分の将来に反映していきたいです。</p> <p style="text-align: right;">【文責 C組 白井一将】</p> <p>大鶴先生の講座で、私達は「行政の役割」について考える切っ掛けを得る事が出来たと思う。行政そのものについての説明から始まる、年金制度・社会保障等の、幅広くも密接に関係するお話の中で、特に印象に残ったものを書きたい。この講座を受けるまで、私は年金を「大人の話題」と思い、気に止めてもいなかった。だが、実は5年後の20歳には加入しなければならぬと知り、初めて年金の身近さを感じた。講座のまとめで「年金という巨大事業」というくだりがあった。今日の年金受給者が加入した当時、パソコンは普及していなかった。その中で、紙の資料を何十年も保管し、使用することを考えると、確かに年金行政の規模に圧倒される。先生は、他にも様々な行政についてのお話をして下さり、将来の参考になった。安部首相との2ショットには正直ビビったが、先輩の雄姿はとてつもなく励みになる。本当にありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">【文責 E組 田久保具典】</p> <p>現在の国会の状況は福島原発の件においても、問題になったころには責任者はすでに辞めている場合が多い。年金に関しても「今はきちんと残っているので大丈夫です、将来のことも保証されています。」などと言われても、僕らが大人になって、職を失い、お金の困った時には日本の借金も増えて支払えなくなっているのかもしれない。僕らは言われるがままに従うのではなく、自分で考え、将来のことを考えて行動すべきだと思う。テレビや雑誌などの情報を鵜呑みしないで、その裏にどういう意図がおろのか、考慮したら、色々わかるはずだ。行政や組織に入る上でその社会の必要性や責任を持たなければならない。たったひとつの失敗で人生が大きく変わる場合もあるし、小さな積み重ねで大きな事業に発展する可能性だってある。相手の立場、状況を知り、見通しをつけてから選ぶのが大切だと思った。</p> <p style="text-align: right;">【文責 E組 日野聖也】</p>	

講師	御船 弘治 先生〔高校24回生〕 久留米大学医学部動物実験センター 准教授 獣医師
題目	人間社会における動物実験の役割 ―医学研究にて活躍する実験動物達―
<p>今回は、獣医の御船先生から動物実験の話の話を聞きました。先生は講義の際に必ず「動物実験は行うべきか」というアンケートをされているそうです。その結果は、動物が犠牲になるのは可哀想だがそれは仕方のないことだという意見が大多数でした。自分もそう思っていました。実際、動物実験のおかげでワクチンや抗生物質が開発されたり、化粧品安全性を確かめたりするのに役立ち、何より日本人の平均寿命を大幅に増やしたのですから。しかし、先生がその後「もし、現在みんなの飼っているペットが実験に使われたら？」とおっしゃったとき、はっとしました。もし自分の家の犬や鶏、亀たちが動物実験に使われたら…。とても「可哀想だが仕方がない」では済まされませんね。医学の進歩は喜ばしいが動物の犠牲は嫌だという矛盾。ただ、僕はこの世界は矛盾に溢れていると思うので、そのうちの1つだと思っています。</p> <p>しかし、それでも御船先生達は「プロフェッショナルの自信」を研究者の原則の1つに抱え、今日も動物実験をされていらっしゃると思います。本当に尊敬しています。 【文責 A組 森海之助】</p> <p>日常生活に關与する動物実験としては、薬の安全性の確認、ワクチン・抗生物質の開発や臓器移植・再生医療の研究などがあるが、それらの動物はすべて人間の代理であるという。つまり、実験動物は人体実験が起こることのないように行われているものなのだ。旧ナチスではそのような実験が行われていたそうだが、現代社会でそのようなことは絶対に行われてはいけないと思う。動物実験では主に人工的に生み出されたマウスが使われるという。特に兄弟交配や親子交配によって生まれる子供は近交退化減少が起こるリスクもあるが、血縁係数が99.6%であり、実験結果に差が出ないという。また、トランスジェニック動物を用いることで特定の遺伝子の働きを調べることができるという。人間の生活で動物実験の恩恵によるものは多くを占めているので、動物実験を批判することは現代の日常を否定することになると僕は思う。 【文責 C組 工藤愛透翔】</p> <p>「御船弘治先生の話聞いて」</p> <p>先生は最初に動物実験において動物が犠牲になるのはかわいそうか、またはやむを得ないことか、と質問を投げかけた。私はやむを得ないと思った。医学の発達のためには必要不可欠な犠牲だと思ったからだ。先生は次にもしあなたが飼っているペットが動物実験に使われるとしても同じことが言えるかと問うた。もちろん簡単にかわいそうだ、やむを得ないということとはできない。だとしたら先ほどまでの私の考えは他の人の立場にたって考えずに出した偽善的な考えだったのだろうか。最初から深く考えさせられた。話を聞き終えた後でも私の考えは変わっていない。動物実験と人間の間には深い関係があり、動物実験なしでは我々の生活は成り立たないといっても過言ではないのだ。今回の講座で私たちの生活は気が付かないうちに動物実験のみならず様々なものに支えられているのではないかという思いを抱いた。これからは動物実験などの私たちの生活を支えてくれているものすべてに感謝しながら毎日の生活を送っていきたい。 【文責 C組 西村相馬】</p>	

動物実験に関して動物を殺すのは可哀想と思う人が多い。特に、もしそれが自分のペットだったらと考えるとついつい動物実験は良くないと考えてしまう。しかし話を聞いてみれば、御船先生は動物を助ける為に獣医師になり動物実験をしていると言う。最初は先生も動物を殺すのは辛かったが、今では克服し、極力動物を殺さないように、動物自身が死ぬ時に辛くないようにしようと努力していると言う。なのに僕らが安易に可哀想だから動物実験は良くないと言うのは間違っていると思った。

また、進路の話では「大学に行く前に進路を決めるのではなく、大学で良い先生や友人に会い、それから考え直すのも良いのでは」とアドバイスを貰った。それならば、将来の事を考えてじっとしているのではなく、今やらなければならないこと、今しかできないこと、今やりたいことを取り敢えずはやろうと思った。

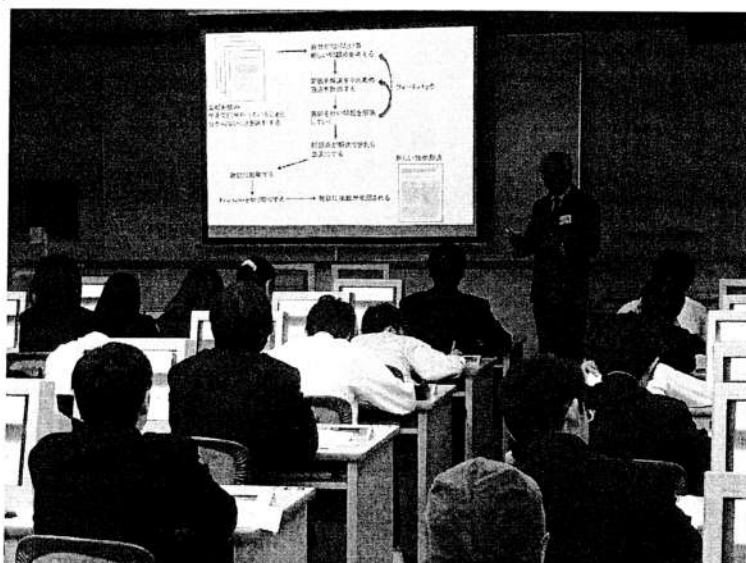
【文責 C組 藤本悠斗】



講師	田中 永一郎 先生〔高校24回生〕 久留米大学医学部生理学講座 脳・神経機能部門 教授
題目	医療、医学、基礎科学
<p>大学の内部についての詳しいお話を聞くことが出来たので大変ためになりました。大学の成り立ちや意義という今まで知らなかったことや、医学部での仕事内容や医師になる過程など様々な幅広いお話の中で特に印象に残ったのは、研究医についての話題です。自分は臨床医になるものだとばかりなんとなく思い込んでいたので、大学で研究をしながら医師として働くということは大変耳に新しく印象に残りました。研究職に就くという選択しが自分の中に新しく出来たかどうかは微妙ですが、2限目の講師の方が「良い研究者は良い臨床家になる」と仰ったのを聞いて研究にも少し興味を持ちました。また海外留学についても話されて、海外留学が現実味を増し、また積極的に考えるようになりました。その他にも求人状況や年収など割と突っ込んだお話までして頂けたので楽しかったです。</p>	
<p>今回の講座では得ることが多いお話をたくさん聞けました。医師になるという自分の夢が少し明確になったので、この講座を受けて本当に良かったです。</p>	
【文責 A組 末次雅保】	
<p>僕は田中先生の講座で、大学で働くという事は具体的にはどのようなものかという事や、研究者とはどうあるべきものなのかという事を聞いた。僕は特に研究者とは常識や先入観にとらわれずに、また現実をよく観察する目や客観的に物事を見る目を持たなければならないという話が印象に残った。また先生のおっしゃっていた人づきあいにおいて大切なこと、つまり相手を表面的な見方でなく内在する理性で認識しなければならないという話は、僕に他者とかわりあいを持っていく中で重要なものを教えてくれた。この講座で僕は医者と言ったら臨床医で、患者さんを治療することが一番やりがいを感じるだろうと思っていたが、大学で研究することの楽しさを知ることができたので、そっちらもやってみたいと思うようになった。この進路講座で自分の未来の視野を広げることができたのでとても良い経験になったなと思った。</p>	
【文責 B組 川口晋】	
<p>田中先生の講義を聞き、あまりイメージのできていない大学のことが、具体的によく分かりました。今、通っている高校とは大きく異なり、興味深く感じました。中でも大学の講座制と、研究から論文の発表までの手順に関しては初めて知り、特に印象に残りました。講座制とは、教授、准教授、講師、助教から成る大学の組織のことで、その中で内部昇進などの移り変わりがあると知った時は、大学も会社みたいだなと思い、大学について、特に教授という職業に対するイメージが変わりました。また、研究をする時は生徒への授業の間に、時に百以上の文献を読み漁り、問題点を考え解決という作業を繰り返し、論文を作成する。そして、その論文を専門誌へ投稿し世間に公表する。このような流れは、将来研究の道に進みたいと思っている自分にとって、とても新鮮なものでした。最後になりますが、ご多忙の中、私たちの為に、貴重な講義をしてくださりありがとうございました。</p>	
【文責 B組 西隆寛】	

田中永一郎先生の講座は大学がどんな処かの説明から始まり、実験について、医学部について、科学者の本質を教えて下さり、いろいろ参考になりました。大学はどんな処かの説明では大学の起源などを知り大学での生活すべきことが分かりました。医学部については医学部そのものと医学部での教育職などを教えてもらいました。この講座から学ぶべきことはたくさんありますが、僕にとって印象に残ったのは後半の話でした。一つは海外留学についてです。海外留学のメリットが少し以外だったこともあります。先生の外国語の慣れ方で印象に残っています。二つ目は科学者の本質についてです。当たり前のことを疑問に思うことや、他人を理性で判断することなど聞いたら納得するようなことですが僕は科学者の本質としてそれらが思いついていなかったので強い衝撃を受けました。この講座で学んだことを自分の進路を考える材料とし、後悔しない道を選びたいです。

【文責 E組 柴田哲治】



講師	伊藤 裕司 先生〔高校24回生〕 純真学園大学保健医療学部医療工学科 特任教授
題目	病理医？料理医？
<p>この講座では、病理という一般ではあまり知られていない分野について伊藤先生が講義をしてくださいました。私自身もあまり知らなかったの、まずは病理の概要を書きたいと思います。医学には、二つの大まかな枠があり病理は基礎医学に含まれます。実際には、臨床医学の面も多く持っているそうです。病理医は、その名の通り病理診断という診断を行います。この診断は、患者の体の一部(標本)を顕微鏡で観察して診断します。この診断が、臨床医などの進める患者の治療法を決める大きな要因になります。特に、がん患者に使う抗がん剤の種類を決めることは、病理医の診断なしでは行えません。このようにたくさん仕事があるにもかかわらず、顕微鏡が見られない、儲からないなどの理由で病理医は激減しています。しかし、近年病理医自身が患者と会ったり、一般病棟に病理科ができたりと、病理も発展しているそうです。</p> <p>この講座では、日本での認知度は低いながらも陰ながら私たちと深く関わっていた病理についてよく知ることができました。このことは、将来医学部に行って医者になろうと思っている生徒にひとつのヒントを下さったと思います。とても興味深い講義をしてくださった伊藤先生に感謝したいと思います。</p> <p style="text-align: right;">【文責 D組 高木爽太郎】</p> <p>私は今まであまり医者という仕事に魅力を感じなかった。人を直接救うことができるというのは素晴らしいと思うが、ただでさえ忙しいうえに緊急手術などで完全な安息の時間がないという印象が強かった。だが、今回病理医という職業について聞き医者も意外といいな、と思うことが出来た。そもそも病理学とは病気になった細胞を研究する学問で、基礎医学に分類される。病理医の主な仕事は、内科医や外科医などの臨床医が採取した患者の組織を顕微鏡で観察し、悪性の組織かどうかについての最終的な診断をする病理診断というものである。病理診断は早いほうがいだろうが緊急性はないため、病理医はその他の医者に比べてある程度余裕のある生活を送ることができる。最近医学の進歩により小さな病変も見つかるようになり、病理医の存在がより重要なものとなっている。病理医限定ではあるが、今回の講座で医者という仕事に対する偏見を捨てることができよかった。</p> <p style="text-align: right;">【文責 D組 渡邊伸哉】</p> <p>自分が最初に病理に触れたのは中2の社会見学の時だ。その時はホルマリン漬けされた子宮をスライスし、顕微鏡で癌細胞を見た。その時にはまさか約20万人ほどの医師の中でたったの2千人しか病理がないなどとは全く思ってもいなかった。</p> <p>医師があまり病理に行きたがらないとあったが、この仕事は人の役に立つ仕事だと思う。それは減少している小児・産婦人科も同じだ。</p> <p>しかし、医師という仕事はとてもハードだ。いつ急変するかもわからない患者をかかえ、カルテ記入などのデスクワークもこなし、なおかつ人命がかかっているので失敗できない。いや、だからこそ、誇れるのかもしれない。</p> <p>また、先生のおっしゃった医師は看護師と技師とは同格であって、協力して、医療を行わなければならないという言葉は、全ての事に通じると思う。相手を下に見るのではなく、同じ“人”として対等に接し、協力しながら物事を成し遂げる—これがこの講座の要点なのではないだろうか。</p> <p style="text-align: right;">【文責 E組 志田祐太郎】</p>	

講師	本田 順一 先生〔高校24回生〕 聖マリア病院 医療の質管理本部 本部長
題目	それでも医師になりますか？

医者という仕事は、僕が想像していた以上にきつくて大変な仕事だと分かった。また、医者になるまでもかなり大変だということが分かった。

医者には大きく臨床医師と基礎医学者という二つの医者がいて、患者を診たり、手術を行うのが臨床医師で、実験や研究を行うのが基礎医学者である。大学病院では、臨床、研究、教育を担っている。また国家試験が受かった後、二年間研修医になる。昔に比べると今の研修医はまだ楽であるらしい。研修時代が終わると医者になるが、臨床医は患者の気持ちを理解することが一番重要であることが分かった。なので、話すのが得意な人がこの仕事にあっていて、研究のほうは、きついけど楽しいことが分かった。

最後に、この授業を受けて、改めて医者という仕事に興味を持ちました。お忙しい中、医者のことを話してくださった本田先生、本当にありがとうございました。

【文責 D組 小田倫久】

僕は本田先生の講座の「それでも医師になりますか？」というタイトルに惹かれて今回の講座を選んだ。先生は血液内科、日本やアメリカでの研究、感染症科部長、医療の質管理本部長など様々なキャリアを積んでおられ、講座ではいろんな立場で仕事をする医師という職業を知ることができた。先生の話から、医師の仕事の過酷さ、そしてその過酷さゆえの大きなやりがいを知ることができ、少々立ち入った話も聞くことができ面白かった。医師にはいくつかの種類があり、開業医と勤務医、勤務医の中では臨床医、研究医などがある。研究医には誰かが言ったことを覆す喜びがあり、研究で培った忍耐力や、物事の過程を考える力は臨床医としても大きく役立つことがわかった。臨床医として最も大切なのは、患者さんとのコミュニケーションであり、それが一番難しいことでもある。患者さんにとっての臨床医はたった一人の主治医で、絶対的な存在であるのに対して臨床医は多くの患者さんを診なければならない。だから臨床医には多くの患者さんと対話し、きちんとした診察のできる心身の強さが必要とされる。このような過酷さの一方で、患者さん一人ひとりとの出会いはかけがえのないもので、医師は患者さんとの対話の中で心を癒してもらいものだと先生は語った。そこに臨床医という職業の大きな魅力を感じた。最後に先生は将来の目標は初めから高いところに設定しなくてもいいというアドバイスをくださった。僕は将来やりたいことが決まらず、悩んでいたが、先生のアドバイスで気が楽になった。第一の目標である志望校合格に向けて、がむしゃらに勉強に励もうと思った。また、先生は今の若い人はリスクを回避することばかりを考えて、それはあまりよくないとおっしゃった。僕は将来自分が本当にやりたいことを見つけて、それが困難であっても負けない精神を身につけたいと思った。そのために附設での生活は大いに役立ってくれるだろうと思う。

【文責 E組 松浦康浩】

題名の「それでも医師になりますか？」という一言にとっても興味を持ち、この講座を受けようと決めました。心身ともに健康な人が医師になるべきで、心が弱い人は医師にならないほうがよいのではないかと、そして一度研究の道を経験した上で臨床の世界に入るべきではないか、という言葉は今まで誰からも言われたことがなかったのですごく新鮮でした。医師は患者さんを治すという仕事をしているが、逆に患者さんから元気ももらって治されている面もあること、救えなかったとしても自分が主治医でよかったと思ってくれる患者さんが1人でもいれば医者になった甲斐があるのではないかとということ、意識がなくても諦めないで治療をすること、この3点が医師になる上で心に留めておくべきことなのだろうなと感じました。題名に込められた意味は、医師になるには医師が精神的にも肉体的にも辛い仕事だが、やりがいもあり楽しい仕事だと伝えたかったのだと思いました。

【文責 E組 安河内駿】